



目次

- P1 …あすなろの40年
- P2 …災害時の肢体不自由児支援について
- P3 …肢体不自由児サポートに関わる養成講座について
- P4 …かがやき講座について

カラフルとは、個性豊かな子ども達がその子らしく過ごしていくことや、時には他の色と混じって新しい色をつくりあげていくことを表現しました。

「あすなろの40年ーあすなろ医療・40年の歩みー」 の刊行

2025年4月、子ども心身発達医療センターの前身である県立小児心療センターあすなろ学園（以下、あすなろ学園）が、高茶屋病院（現三重県立こころの医療センター）から分離独立し、40年が過ぎました。

あすなろ学園では、10年の節目ごとにその来歴を振り返るべく、10年、20年、30年と記録史を刊行しており、あすなろ医療を引き継ぐ当センターにおいても、この40年の節目を機に「あすなろの40年あすなろ医療・40年の歩み」を刊行いたしました。

内容は、「あすなろの30年」以降の10年間の取組が中心となっています。この10年の間には、あすなろ学園と草の実リハビリテーションセンター及び児童相談センターの言語聴覚機能との統合・移転や、新型コロナウイルス感染症が全国で蔓延するなど大きな出来事がありました。

そのため、この「あすなろの40年」では、各部門が自分たちの取組を記録し振り返るだけでなく、こうした大きな出来事をどうやって乗り越えてきたのかを記すとともに、今後の課題や展望をまとめています。また、かがやき特別支援学校あすなろ分校にも執筆協力をいただきました。

最初に「あすなろの10年」を発刊した当時の園長清水将之が「あすなろの10年」でこう述べています。

『この機会に、これまでの航跡を記録し点検し、関係各位の批評を受けて、続く10年においてより高みに立った医療を展開し、より上質の療育を県民に提供していく必要があると考えた。それがここにお届けする10年の記録である。』この意図は、「あすなろの40年」においても変わっていません。

変わったことといえば、多くの皆様にこの「あすなろの40年」をご覧いただくため、センターホームページに電子ブックとして掲載できたことです。紙版はグラフや写真が白黒ですが、電子ブックではカラーで鮮明になっています。また、元職員からの寄稿も掲載しています。気になるところから、ページをめくっていただければと思います。

是非多くの皆様に、ご一読いただき、「あすなろ医療・40年の歩み」を知っていただくとともに、ご意見、ご批評をいただければ幸いです。



40年史への
直接リンク



災害時の肢体不自由児支援について

令和7年7月に三重県総合文化センター文化会館中ホールにおいて、「ここ・から」研修会を開催しました。全体テーマを「災害時、子どもの育ちを支えるために何ができるか」とし、午前の部では災害時の肢体不自由児支援について取り上げました。講演とシンポジウムを行いましたので、その内容をご紹介します。

まず、「能登半島地震から学んだこと～医療的ケア児支援を中心に～」と題し、国立病院機構医王病院小児科(副院長)丸箸圭子氏にリモートにてご講演をいただきました。講演では、能登半島地震での支援のご経験から、院内に設置のいしかわ医療的ケア児支援センターこのこのが、関わりのある児について状況の把握や必要物資の把握、支援につなげる役割を担ったことをご紹介します。そのうえで、災害が起こる前から支援者となつながりを持っておくこと、避難計画とともに訓練や防災キャンプを通して実際に体験しておくことが大事とのお話がありました。



国立病院機構医王病院小児科
丸箸圭子 副院長

その後、「もしもに備える～災害時の肢体不自由児支援の実践と課題～」と題し、シンポジウムを行いました。まず、鈴鹿医療科学大学保健衛生学部リハビリテーション学科理学療法学専攻助教多田智美氏にJRAT(※)活動の一環として能登半島地震にて支援をされたご経験から日頃から顔の見える関係を築いておくこと、必要な支援や行動を予め考えておくことの重要性が語られました。また、名張市なばりの未来創造部危機管理室稲垣和幸氏より市において個別避難計画を作成されたご経験から、個別避難計画を立てることが連携の強化につながることで、災害時には行政だけでなく地域社会全体の協力が不可欠であることなどをお話いただきました。これに対し、三重県防災対策部地域防災推進課長長井健治氏から避難行動要支援者に対する個別支援計画の作成があまり進んでいないという課題が示されました。



シンポジウムの様子

今回の講演・シンポジウムでは、災害が起こる前から支援者となつながりを持っておくことや、被災した場合に必要な支援や行動を予め考え、実際にやってみることも重要というのが登壇された先生方に共通するお考えでした。

障がいのある子どもを持つ保護者は日々の生活で精一杯で実際に起こった時のことを考えられなかったり、子どもの障がいを周囲の人に知られることにも抵抗を感じているかもしれません。しかし、災害が起こる「その日」は突然やってくるものです。この機会に災害への備えについて改めて考えてみませんか。

※JRAT…一般社団法人日本災害リハビリテーション支援協会。発災後のリハビリテーション支援活動などを行っている。

肢体不自由児サポートに関わる養成講座について

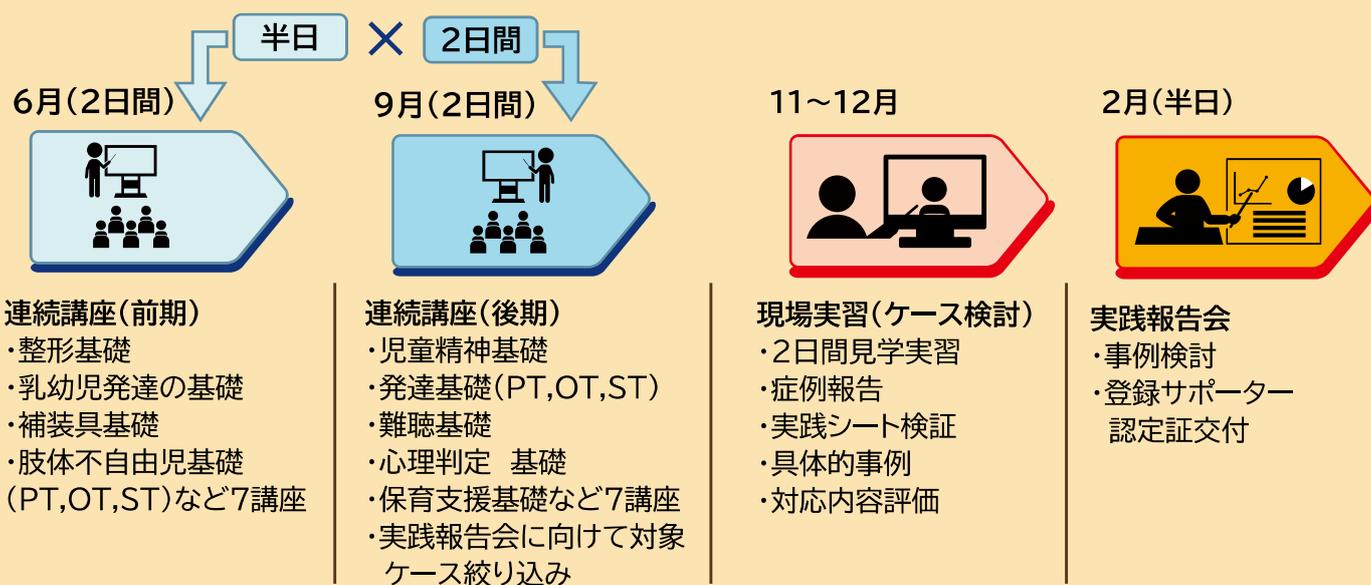
当センターでは、肢体不自由児に関わる人材育成を目的として、地域の支援者や医療機関・教育機関の皆さまを対象に、養成講座を実施しています。

肢体不自由児支援の基礎知識から最新の支援方法、当センターでの多職種連携の実際まで、現場で活かせる内容を提供いたします。

主催：三重県立子ども心身発達医療センター（地域支援・リハビリテーション課）

		肢体不自由児登録サポーター	小児リハビリネットワーク登録セラピスト
対象		県内地域機関や教育機関で肢体不自由児支援に関わる職員等	県内医療機関および関係機関で肢体不自由児支援に関わるセラピスト(PT,OT,ST)
内容	6月	○講義(集合研修) ・発達の基礎 ・肢体不自由児支援の基礎と最新の知見(医師・PT,OT,ST) ・心理検査、保育、難聴児支援に関する基礎 ・発達障害基礎(医師)	
	9月	○ステップアップ研修(現場実習・研修) ・当センター業務見学 > 整形診察、リハビリ業務、草の実病棟保育、多職種連携(会議、研修)等 ・症例・事例相談 等	
	11~12月	○症例検討(オンライン) *必要に応じて ・指導計画・立案・検討 ・実践報告まとめ	○症例検討(オンライン) *必要に応じて ・リハ計画、基礎情報集約等 ・症例まとめ
	2月	○実践報告(集合研修) ・実践症例報告会 *肢体不自由児、発達障害児 等	○症例報告(集合研修) ・症例報告会 *肢体不自由児、発達障害児 等

肢体不自由児登録サポーター育成プログラムの場合



支援に携わる皆さまが、より適切で質の高い支援を実践できるよう、当センターが持つ知識・技術を共有し、地域との連携を深める機会となれば幸いです。

研修会の詳細につきましては、センターホームページ「イベント・研修案内」に掲載しております。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。





かがやき講座について

かがやき特別支援学校は、隣接・併設する病院に入院しながら学ぶ特別支援学校です。3校（緑ヶ丘校、草の実分校、あすなろ分校）からなる病院連携学校群で、それぞれ対応する医療機関と密接な連携の下、学校運営をしています。

かがやき特別支援学校では、特別支援学校のセンター的機能の一つとして、公開研修会「かがやき講座」を開催しています。あすなろ分校においては、主に「発達障がいへの理解や支援」をテーマとして、併設する子ども心身発達医療センターに入院している発達障がい等のある児童生徒についての実態の把握や指導支援、環境の整備等の実践報告をしています。

また、支援を必要とする子どもたちの治療や研究をされている先生方より専門的な内容をご講演いただいています。例年、学校教員だけでなく、発達障がい等の支援に関わられている多くの方に参加いただいています。

過去の講座内容

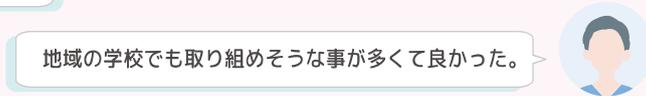
H30年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「教室での行動障害～発達障害や愛着障害との関連～」 国立大学法人三重大学教育学部 松浦直己教授 ・「児童虐待について」 子ども心身発達医療センター 医師
R 1年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「読み書き障がいの支援について」 国立大学法人三重大学教育学部 松浦直己教授 ・「発達障害のある子どもへの支援医療機関との連携について」 子ども心身発達医療センター 医師
R 2年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「教室でできる認知行動療法 パニック行動を繰り返す子どもたちの理解と対応」 国立大学法人三重大学教育学部 松浦直己教授 ・「ゲーム障害～ゲーム・ネットに依存する子どもへの支援」 子ども心身発達医療センター 医師
R 4年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「医療と教育の連携教育現場に求めること」 子ども心身発達医療センター 医師
R 5年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「医療と教育の連携療育の現場から見えてきたこと」 子ども心身発達医療センター 保育士
R 6年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「医療と教育の連携二次的な問題を予防する支援について」 子ども心身発達医療センター 医師
R 7年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「医療と教育の連携子どもの特性に合わせた支援」 子ども心身発達医療センター 保育士

参加者の声

(R 7年度)



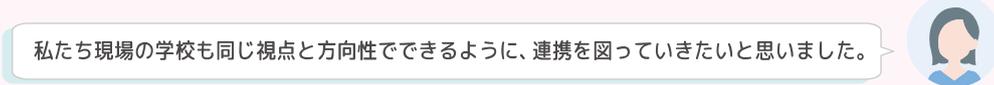
すぐにやってみようと思える取り組みがあり、たいへん参考になりました。



地域の学校でも取り組みそうな事が多くて良かった。



特性を持つ子だけでなく、すべての生徒に必要な対応方法だと思いました。



私たち現場の学校も同じ視点と方向性でできるように、連携を図っていきたいと思いました。



普段なかなか接することがない様々な立場の方の専門的なお話が聞けるので、とてもありがたく思っています。

広報委員会より

カラフルNo.16をお届けします。
寒い季節こそ健康第一。心も体も
温かく保って寒い冬を乗り切ろう。

広報委員(岡原・野口・寺田・井上・田口・中根)

三重県立子ども心身発達医療センター

〒514-0125 三重県津市大里窪田町340番5

電話 059-253-2000 (代)

FAX 059-253-2029

URL <https://www.pref.mie.lg.jp/CHILDC/>

